

でんでんむしの かなしみ

新美 南吉

いっぴきの でんでんむしが ありました。

ある ひ その でんでんむしは たいへんな ことに きが つきました。

「わたしは いままで うっかりして いたけれど、わたしの せなかの からの なかには かなしみが いっぱい つまって いるではないか。」

この かなしみは どう したら よいでしょう。

でんでんむしは おともだちの でんでんむしの ところに やって いきました。

「わたしは もう いきて いられません。」

と その でんでんむしは おともだちに いいました。

「なんですか。」

と おともだちの でんでんむしは ききました。

「わたしは なんと いう ふしあわせな ものでしょうか。わたしの せなかの からの なかには かなしみが いっぱい つまって いるのです。」

と はじめの でんでんむしが はなしました。

すると おともだちの でんでんむしは いいました。

「あなたばかりでは ありません。わたしの せなかにも かなしみは いっぱいです。」

それじゃ しかたないと おもって、はじめの でんでんむしは、べつのおともだちのところへ いきました。

すると その おともだちも いいました。

「あなたばかりじゃ ありません。わたしの せなかにも かなしみは いっぱいです。」

そこで、はじめの でんでんむしは また べつのおともだちのところへ いきました。こうして、おともだちを じゅんじゅんに たずねて いきましたが、どの ともだちも おなじ ことを いうので ありました。

とうとう はじめの でんでんむしは きが つきました。

「かなしみは だれでも もって いるのだ。わたしばかりでは ないのだ。わたしは わたしの かなしみを こらえて いかなきや ならない。」

そして、この でんでんむしは もう、なげくのやめたので あります。

〈出典 『名作童話 新美南吉30選』(春陽堂書店、二〇〇九年)〉

【著者】新美南吉(にいみなんきち)

一九二三(大正二)年—一九四三(昭和一八)年

児童文学作家。愛知県生まれ。

【著書】『手袋を買いに』『こん狐』『おじいさんのランプ』など